

ホームレス。



人海にキルメイト
 題字 永六輔

歯ブラシと

女子アナと



栄養状態が悪く、歯を磨く習慣もない……そんな悪循環から歯が悪いホームレスは多い。子供時代にイジメを受けた経験を持つ村上さんは、何かできないかと考え、歯ブラシを届ける支援を思いつく。1本の歯ブラシに託す、その思いとは――

ホームレスに歯ブラシを贈るプロジェクトを立ち上げ、支援活動続ける
 フリーアナウンサー 村上知奈美さん

村上さんと山本さんの交換日記には
心温まる交流が……



「どうして? つて思いましたよ。あんなにイジメられていたんですからね。でも、母はいうんです。もしかしたら、あなたもイヤミなところがあったのかもしれない。相手の心を刺さる部分があったのかもしれない。その人の悪い面を引き出すのではなくて、いい面を引き出すように考えてみない。イジメられても笑顔で接するようにしてみなさい。つて」

すると不思議と、次第にイジメはなくなっていく。やがて村上さんは高橋生になり、東京への憧れを強くしていく。

「中学2年生のとき、父の友人の結婚式に行った東京・原宿で、芸能人が普通に歩いている姿を見て、こんな世界があるんだ、つて(笑)。ミハハといえ、そうなんです。どうしてでも東京に出て行きたい、と思ったんです」

そのために選んだ大学は、東京・渋谷にある青山学院大学だった。入学後はデニス・スクールに所属し、2年生のときは「ミス青学」に選ばれたこともあった。楽しく過ごしてきた大学生活だったが、村上さん自身、これといった目標もなかったため、卒業後、何をしたいのかわからなかった。けれど、実家には帰らない。気がつくとも1年半の時間が流れていった。

「周りの友達は就職し、目標を持ってバリバリやっていたから、焦ってしまいましたね」

あるとき、ふと目にとまったのが、以前、ミス・コンテストで声をかけてくれた現在の所属事務所の社長からもらった名刺だった。思い切った社長に連絡を取ると、テレビ番組のオーディションを受けることをすすめられた。そして、合格。テレビ東京の『ニュースアイ』で天気予報を担当することになった。コーナーは10分程度だったが、

「毎日、新鮮な体験ばかりで、どんどん仕事量が面白くなっていった」

正直、当初は憧れだけで飛び込んだ世界だった。しかし、村上さんの中で、何かが少しずつ変わっていった。

そしてその後、バラエティ番組のレポーターなどを経て「BS フジ」の報道番組を担当。28歳のときのことだ。

「原稿を読むという難しさを感じたのと同じで、原稿を読むだけの自分に疑問を持った。この時期でして、ニュースは自分で理解して、初めて人に伝えられるんだ。と。じゃあ、私が本当に知りたいテーマって、いったい何なんだろうと深く考えるようになった」

そんな思いの中、ふと脳裏を過つたのが、東京・新橋で見かけていたホームレスの姿だった。

「いつから何時まで、ここにいるんだろう。いないときはどこへ行って、何をしているんだろう?」

田舎の祖母から送られてきたミカンをテレビ局に差し入れよう、いつもの道を通りかかったある日のこと。

「ホームレスの人たちにも少し分けてあげたいの、もし近寄ったらあがるという行為が喜ばれるのか、それとも失

った施設を設置している。また、公園などに小屋を建てて生活しているホームレスに対して、地域生活移行支援事業として月3000円の家賃でアパートを提供している。が、しかし……と、男性はいう。

村上さんは、74年に大阪・寝屋川市で生まれた。兵庫県芦屋市の小学校に通い、2年生のときに父親の仕事の関係でアメリカ・ニューヨークへ。村上さんは、現地の小学校に編入した。

「日本人は、クラスに私ひとりだけ。最初は英語もしゃべれないし、戸惑いもありました。だけど、アメリカには人との違いを認めて、個性を大切にしているの深さみたいなものがありましたからね。だから、溶け込むに時間はかからなかったです」

小学5年生の終わりに帰国し、名古屋で暮らすことになった。ところが、帰国子女の珍しからだろうか、イジメの標的になってしまった。

「アメリカン・バイブル」とからかわれて……。ちょっとぶつかっただけで汚いなどといわれて……」

ノートへの落書きや、靴を

「自分の気持ちに納得がいかなかった村上さん。その答えを見つければ、ホームレスの支援団体へ連絡。代々木公園でのボランティア活動へ参加を申し出た。03年1月のことだった」

このことをきっかけに、当時担当することになったラジオ番組で、定期的にホームレス問題をレポートすることになった。

「担当プロデューサーの理解があり、ホームレスの人たちの生の声をレポートして、放送させてもらえるようになりました」

初めて自らテーマを見いだし、取材を担当する放送ができるように。村上さんがコーナーを担当する「JDNアツドモニング・ショー」は、やりがいのある仕事となった。

やがて、取材活動を通じてひとりのホームレスと知り合った。山本弘孝さん(73)だ。山本さんは関西学院大学の経済学部を卒業後、国会議員の秘書を経て、厚生省の社会保険事務所に勤務。その後、健康保険組合に移った。が……、「職員給料の大幅カットを巡って、役員会でケンカして

借金が増え、家賃滞納で夜逃げ同然、アパートを出て

村上さんが参加したボランティア活動は、代々木公園内に当時200以上あったデントのバトロールだった。

「いま考えれば恥ずかしいことですが、最初は、携帯電話を片手に、何かあったらすぐに110番できるようにと、緊張でガチガチでした(笑)」

バトロールには、ホームレスもボランティアとして参加していた。報酬として支援団体からカップラーメンが配布された。

ところが、私は突然の参加だったで、私のカップラーメンがひとつ足りなくなりました。すると、ホームレスのおじさんが、俺の食をばねよ、といつて、私に差し出してくれたんです」

村上さんにとって、それは衝撃的な出来事だった。

(「いばん偏見を持っていたのは、結局、自分だったんじゃないのか……」)



「Adult Oriented Radio」(JFN) で現在、ナビゲーターを務めている

暮れも押し迫った12月。東京・原宿はいつものように若者たちで賑わいを見せていた。対照的に、そこから少し離れた代々木公園はひっそりと静寂に包まれ、本格的な寒さの到来を予感させていた。

その一角、テント暮らしを余儀なくされるホームレスたちの家。がある。青いビニールテントをつなげただけの2畳ほどの空間にダンボールの壁で、居間、キッチン、寝床に区別られて、中には携帯用コンロ、ラジカセ、食器類、鍋、布団が1組置いてあった。ボランティア団体から支給されたものもあるが、大半は拾ってきたものだという。

寒空の中、初老の男性がビールの空き缶に水を汲むため、テントから出てきた。男性は工事現場などを渡り歩き、数年前、ここに流れているという。

「おっちゃん、久しぶりで。元気でしたか?」

ひとりの女性が近づいて声

をかける、手を止めた男性の表情が一瞬に和んだ。

その声の主は、フリーのアナウンサー・村上知奈美さん(32)だ。

「私が取材をきっかけに代々木公園を訪れるようになって4年がたちます。ホームレスの人たちの生の声や切実な思い、現状などを多くの人たちに聞いてほしいと思って、3年前に『東京ホームレス』というホームページを立ち上げたんです」

開設後には、次々と応援や励ましのメールが届くようになった。「自分たちにも、何かお手伝いができませんか」と。そこで村上さんは、もっと身近にホームレスの人たちに対処して、できることはなにかと考えるうち、ふと思いついた。

「ホームレス生活を余儀なくされている人の中には、歯の状態が悪い人が圧倒的に多かったんです。それで、歯磨きして?と聞くと、そんな



青春を過ごした青山学院大学の正門前で。4年生のとき

ノートへの落書きや靴を隠されたり…イジメの標的に

「就労支援があるわけじゃないから、結局、仕事がないれば、家賃が払えない。元の場所に戻ってくるしかないんだ。わかるだろう……」

代々木公園に、木枯らしが舞っていた。

「就労支援があるわけじゃないから、結局、仕事がないれば、家賃が払えない。元の場所に戻ってくるしかないんだ。わかるだろう……」

代々木公園に、木枯らしが舞っていた。



「等身大の支援。多くの人の心に届くよう、村上さんは歩き続ける」

て、失業、倒産といった理由が激増している。目立つのが「ホワイトカラー」からの転落組だという。

東京・新宿の西口公園で寝泊まりする坂野孝司さん（仮名・47）は昨年、何の前触れもなくシロツメにされた。あまりのショックで酒に溺れ、ギャンブルにのめり込んだ後、サラ金に手を出し、妻子から逃げるように家を出た。そんな坂野さんがいう。

「20年間コツコツ働いてきたあけくが、このありさま。本当に、世の中なんて一寸先は闇だよ。おかげで人が信じ

られなくなったよ」

元ホームレスで「歯みがきプロジェクト」のメンバーのひとり、尾崎辰雄さん（54）も、

「勤めていた新聞販売所の社長に給料を払ってもらえず、しかも気がついていたら自分の名前が無断で使われて、多額の借金を背負わされてね。でも最近、ようやく何とか生活保護申請が通って、アパートに住めるようになったんだ。ホームレスになると日常生活だけでは、気が持たない。さういふくもんだよ、ほんと……」

前出の山本さんも声を落と



「歯みがきプロジェクト」のメンバーが参加するバンドのライブで、活動支援を呼びかけて

さらに村上さんは、取材を通して、さまざまなホームレスとの交流も深めている。みっちゃんこと、黒沢菊子さん（48）もそんな中のひとりだった。

みっちゃんは、都内の公園で野宿を13年ほどしていた経験がある。空き缶を集めて生計を立てていたが、飲食店の洗い場で働くようになった。村上さんはいう。

「彼女は8人きょうだいの長女で、母親は亡くなったものの、父親は少し前までは健在で、日曜日はよく会いに行っていたようなんです。でも逆

「今日父の日でした。僕は今まで二人の子供に対して何もしてあげられなかった……対面を実現できるような、何とかしては……」

それに対して村上さんも、こんな日記で返す。

《反省ばかりじゃなく、次のステップに進んでいかなくては……》

山本さんからの日記は1日分だけで、2ページに及ぶこともあった。村上さんは、ホームレスの人たちの生の声を多くの人たちに知ってもらいたいと考え、山本さんに「東京ホームレス」のブログへの公開を提案。快諾を得た。すると、大きな反響がさまざまな人々からあった。

「ホームレスの皆さんの悩みや、苦しみがよくわかって胸が締め付けられました」

《ホームレス対策に真剣に取り組む組まぬ国や自治体に強い憤りを感じます》

「心」の底から思いやってあげられる人の存在が大切！

厚生労働省が03年に発表したホームレスの実態に関する全国調査の総数は25000人超。50歳以上の割合が80・8%と圧倒的に多く、平均年齢は55・9歳。また「路上生活になった理由」として、借金、飲酒、ギャンブルといったものが少なくない、かわつ

と、やはりホームレスイコール、怠け者になってしまうんですね。でも、その背景に何があるのかは、話を聞いてみなければわからない。そのためには根気強い心のケアが必要だと思ふんです」

また同じくメンバーのひとり、岸野可弥さん（31）も「心の問題だからこそ、大上段に構えて、声高に叫んでも解決しないと思うんです。そういう意味でも、村上さんのような、身近でくく自然な支援を受け入れられているのだと思います」

村上さんはいう。

「自分の意志に反して、ホームレスになってしまった人がほとんどだと思ふんです。人間は、理屈では割り切れない弱さを持っています。そのときに誰かが声をかけてあげたら、あるいは、その後の人生が違ふものになっていくかもしれない。紙一重なんです。だからこそ、思いやってあげられる人の存在は大切だと思ふんです。何もこれは、ホームレスの人たちに対することでもなく、人間関係、また親子関係にだっていえることだと思ふんです」

村上さんの中には、子供時代にイジメを受けたときの、母親からの言葉がいまも心に残っている。

「人のいい面を引き出すよう

とつづく昔に忘れちゃったよ。なんていう人が、写真を肌身離さず持っていたりするんです。でも、みんな自分に負い目があるって会えないという。胸が痛くなります……」

でも、その気持ちをどこかで誰かが聞いてあげられればいいなあ、と思います。話すことでホッとしたり、気が楽になるってこと、あるじゃないですか」



ホームレスの人たちに歯ブラシを。村上さんの笑顔が場を和ませる

平賀形成外科

(美容外科) 院長 平賀義雄

中央線・阿佐ヶ谷駅北口4分

〒166-0001 東京都杉並区阿佐谷北1-42-10

http://www.hiraga-keisei.jp

☎(03)3330-2200 (入院設備有)

取材・文 山田敦司
撮影・安部俊太郎

